

シドニー

「流刑地」を切り拓いた男たち

遙か南大陸へ

南田登喜子「文」・ミディ中嶋「写真」

船旅でおよそ8カ月、遙か南の大陸へ……。イギリスの探検航海家キャプテン・クック一行の東海岸上陸を発端とする白人によるオーストラリア開拓史は、地球半周という壮大なスケールの「島流し」、つまりイギリスの流刑植民地という形でスタートした。

僻遠の地に送り込まれたのは、なにも流刑囚ばかりではない。ゼロからの植民地建設、という一大プロジェクトの中心的役割を担った男たちもまた海を渡り、それぞれのやり方で、過酷な開拓初期をどうにかこうにか乗り越えていった。その中心舞台となったのは、シドニーだ。

■キャプテン・クック

Captain Cook (1728～1779)

タヒチでの金星の太陽面通過の観測のために調査隊を率い、エンデヴァー号の艦長として南太平洋へ派遣されたキャプテン・クックことジェームズ・クック。ボタニー湾に上陸して8日間滞在後、東海岸沿いに航海を続けて北上し、オーストラリア東部の領有宣言を行った。

真つ青な海に着水するかのよう
に高度を下げ、キラキラ光る水面に手が届き
そうところで、突然滑走路が現れてラン
ディング。3本の滑走路のうち、2本が湾
に突き出しているシドニーのキングスフ
ォード・スミス国際空港では、そんなア
プローチが可能だ。

オーストラリアで最も忙しい空港は、市
内から南に約9キロのボタニー湾北岸に
位置している。メインの滑走路をまっす
ぐ南へ伸ばした先にある対岸のカーネル
半島は、「伝説の南方大陸を探索せよ」
という秘密の指令を受けたキャプテン・
クックが1770年4月に初上陸した場所。
その18年後には、英国の流刑囚を乗
せた最初の入植船団ファースト・フリ
ート（第一船団）がボタニー湾にやつて
きた。飛行機でシドニーに到着する訪
問者の大半は、気付かないうちに、オ
ーストラリアの開拓史上もつとも重要
な意味を持つ場所に降り立つことになる。

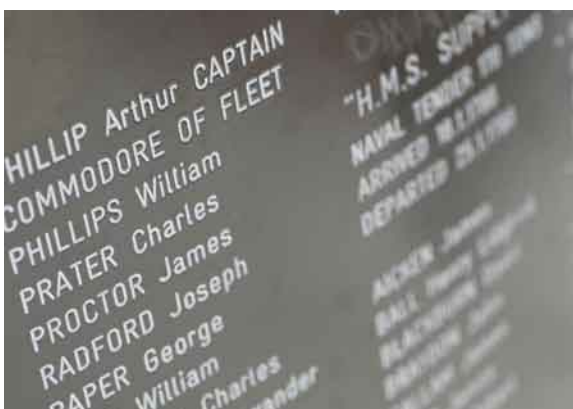
最初の植民地政府が設置されたシド
ニーには、開拓時代の息づかいを伝える
歴史的建造物が多数残っており、今
なお現役として活用されているものも
少なくない。周辺には、新世界の急速
な近代化を土台から築き上げる役割を

担った総督や探検家の像が点在してい
る。

「シティ」と呼ばれる市中心部へは、
空港から車や電車で約15分。東側一
帯に広がるハイド・パークの中にあ
るキャプテン・クック像を出発点に、
「黙して語らぬ像巡り」に出かけてみ
よう。

ヨーロッパ人の「新大陸」

記録に残っている中で、最初にオー
ストラリア大陸に上陸したヨーロッパ



人は、1606年に大陸北東端のヨー
ク岬に到達したオランダ人だ。その後
も西海岸などにヨーロッパ人がいくど
も達しているながら200年近く放つて
おかれたのは、資源や市場、または労
働力の確保が期待できる土地だとは誰
も思わなかったからだろう。

キャプテン・クックは、すでに確認
されていたヴァン・ダイーメンズ・ラ
ンド（現タスマニア島）を目指して航
行中に、暴風で北寄りの進路となつた
せいで、大陸南東部の陸地を目にして
海岸線沿いに北上を続け、結果的に東
海岸に上陸した初めてのヨーロッパ人
となつた。ボタニー（植物学）湾とい
う地名は、一行が周辺で珍しい植物標
本の採集を行ったことにちなんで命名
されたもの。航海日誌には可耕地や水
源の存在も記されている。

1788年に英国からの入植が始
まったのは、アメリカの独立によつて、
代わりの流刑地が必要になつたため。
それは、西洋社会に「発見」された新
大陸の行く末を決定づける大きな運命
の曲がり角となつたと同時に、自然と
調和した狩猟・採集生活を営んできた
先住民アボリジニに降つてわいたよう
な災難をもたらすことになった。



囚人宿舎として1819年に建造されたハイド・パーク・バラックス。
流刑囚でありながら政府の建築家となったフランシス・グリーン
ウェイが設計した代表的な建物。グリーンウェイは文書偽造の罪
により英国で死刑を宣告された後、14年の流刑に減刑され、セ
ント・ジェームズ教会の建設やオペリスク（方尖塔）の設計など
数々の公共建築に携わり特赦された。1986年にオーストラリア
ドル紙幣が初めて発行された際には、10ドル札の肖像になった



上：ボタニー湾に面した街、ブライトン・ル・サンズにある
ファースト・フリート・モニュメントの台座部分には、最
初の入植船団でやってきた入植者たちの名が刻まれている
右：シドニーっ子の憩いの場となっているハイドパーク



1：旧総督邸

マックオーリー総督の帰国により工事が中断した後、設計をやり直し、1845年に完成した総督邸。復興ゴシック様式の洗練された威厳ある建物が、経済的な発展を遂げつつあった時代の栄華を今に伝えている

2：オーストラリアの国章

後ろに歩くことのできないカンガルーとエミューがデザインされ、「前進あるのみ」という意味が込められている

3：州議事堂

1814年にシドニー病院として建設された建物の一棟が議事堂の中核をなしている。後方に12階建ての近代的なビルが増設されたが、正面からはまったく見えない造りになっている

開拓が始まる前に航海先で他界したクックは、たとえ生きていたとしても、未知でなくなつた大陸に興味はなかつたのかもしれない。けれど、オーストラリア近代史は、クック一行のたつた8日間の滞在報告を基に始まつた。入植後わずか220年で、人口420万人の大都市に成長したシドニーの街を見つめるクックの像に、その変貌ぶりの感想をそつと聞いてみたい気がする。

都市化を進めた革新的「独裁者」

ハイド・パーク北側にある木々のトンネルをくぐつてまっすぐに進むと、開拓初期に建てられた建造物の並ぶマックオーリー・ストリートに出る。通りの名前になつているラクラン・マックオーリー総督の像は、ニュー・サウス・ウェールズ州議事堂を忙しげに出入りする政治家たちをじつと見つめている。

1810年に着任したマックオーリーは、「収容所よりはいくらかまし」程度だったシドニーの都市計画を発表し、囚人を使役して次々に学校や道路を建設した。病院や市場を開設するなど、繁栄の基盤を確立することに

尽力し、植民地最初の銀行や郵便局も設立している。

刑期を終えたり、特赦を受けたりした元流刑囚を対等に扱おうとしたマックオーリーに対し、官僚や特権階級にあった富裕層は激しく抵抗した。治安判事に元囚人を登用したりすることは、当時としてはあまりにも進歩的すぎたのだろう。後年、植民地統治の公式調査のために派遣されたジョン・トーマス・ビッグには、まったく理解できず、批判派から聴取した内容に基づいた偏向的な報告書を提出した。

おかげで英国に帰国したマックオーリーは失墜した名誉の回復と、赴任前に約束されていた年金の獲得に奔走する破目になり、ようやく満足できる額の年金の確約を取り付けた3カ月後に、気の毒にも62歳で急死してしまつた。

尊大で独裁的と評されるマックオーリーだが、思いのほか愛妻家だったらしい、一人目の夫人が亡くなつた時は黒い腕章を4年以上も付け続けたというし、シドニーでホームシックに陥つた二人目の夫人のためには、本国との間を行き来する船を眺められる場所に、砂岩の椅子を造らせている。ミセス・マックオーリース・チェアのある岬は、

オペラ・ハウスとハーバーブリッジを見渡すことができる絶好の撮影ポイントとして知られ、多くの旅行者が訪れる観光名所になっている。

不運の探検家と愛猫

当初、新大陸は「ニュー・ホランド」と呼ばれていた。海洋探検家マシュー・フリンダースは、その航海記『テラ・アウストラリスへの航海（*Voyage to terra Australis*）』の中で、正式名称をオーストラリアとすることを提唱し、その呼称が広まりつつあることを知つたマックオーリーの進言により、英国海軍省が正式に採用を決定したという経緯がある。

冒険心あふれる21歳のフリンダースが、リライアンス号に乗つて植民地に向かつたのは1795年のこと。到着後、各地に探検に出かけ、それまで陸續きと考えられていたヴァン・ディーマンズ・ランドを一周して島であることを証明した。インヴェステイゲーター号の指揮官として、さらなる植民地探検に繰り出したのは1801年で、翌年7月から約11カ月かけて初めてのオーストラリア大陸周回を成し遂げて

■ラクラン・マックオーリー

Lachlan Macquarie (1762～1824)

第5代総督(1810～1821)。副総督として赴任する予定だった48歳のマックオーリーは、病気のために辞退した総督任命者に代わって着任し、12年間この地にとどまつた。その間に、自由移民を含めた植民地の人口は3倍以上の3万8千人に膨らんだ一方、流刑囚一人当たりの年間経費は約3分の1に縮小した。



シドニー・コーヴ。シドニー・フェリーには、ファースト・フリートにちなんだ名前がついている

■アーサー・フィリップ

Arthur Phillip (1738～1814)

初代総督(1788～1792)。リスボンからブラジルまで囚人輸送をしたり、従軍後に数年間農場を経営したりしていた経験などから、初代総督に選ばれたといわれる。植民地の発展を担うのは自由移民だと考えていたが、最初の自由移民が上陸したのは、フィリップが帰途についた後だった。



■マシュー・フリンダース

Matthew Flinders (1774～1814)

威厳ある見た目と相反して温和な性格だったといわれる。探検中、片っぴしから新天地に地名を付けていき、多くの友人や知人の名前を各地に残しながら、自分の名前は決して使わなかったのだそう。偉業を称えて、今ではさまざまな名称にその名が冠されている。彼の日記や航海日誌が州立図書館に所蔵されている。



フリンダースと航海に出たトリム

誰もやりたがらなかった前途多難な任務だけに、初代総督に与えられた権限はほぼ無制限に近かったとはいえ、流刑囚の到着前に農業経験者や職人を送り込むべきだというフィリップの提案は採用されなかった。職業が判明していた囚人は半数に満たず、辺境の過酷な生活を切り開くために最低限必要な「食」と「住」の確保に役立ちそうな仕事をしていたのは、漁師や肉屋、パン屋、大工や左官、鍛冶屋など、ごくわずか。事前の現地調査すら行われずに性急に進められた植民政策は「棄民」同然の扱いで、本国の為政者による体のいい厄介払いだったことが今ならよく分かる。

それでもフィリップは囚人たちに規律を守らせるだけでなく矯正を試みることを決意し、食糧難に直面すると、立場に関わらず平等な配給を行い、先住民のアボリジニに対しても、友好関係を築くことを徹底する姿勢を見せた。その精神が後の統治者たちに継承されていけば、と思わずにはいられないけれど、情熱を持ち、良識と情け深さを兼ね備えたフィリップが最初の指導者選ばれたことは、開拓時代の幕開けとしては幸運なことだったといえるだろう。

荒くれ者と正義漢

入り江の西側には、現存するシド

大陸一周には、結婚したばかりの妻の同行を願っていたが許可されず、ようやく再会した時には、9年3カ月の歳月がたっていた。代わりにずっと一緒に未知の世界を探検したのは、愛猫トリム。リライアンス号の中で生まれ、オーストラリア周囲にも同行し、フランス島で最期を迎えたトリムにとっては、船旅の大冒険こそ人生、いや猫生そのものだったに違いない。

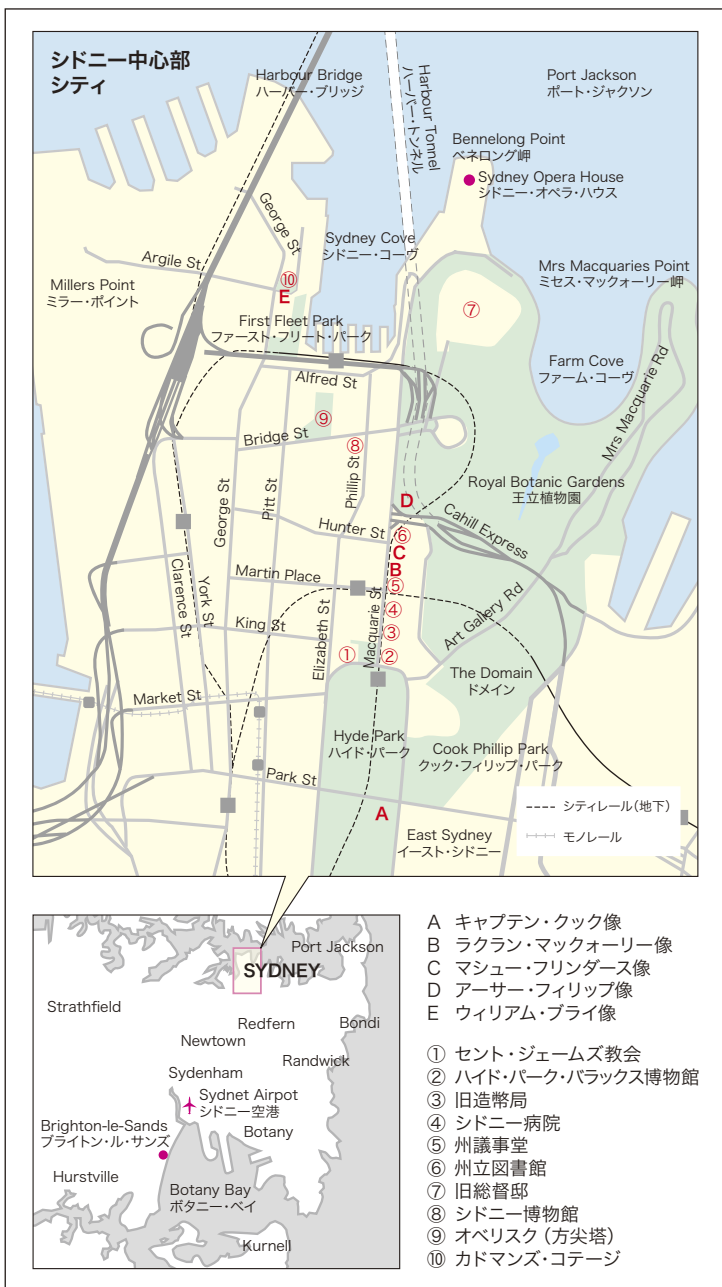
ニュー・サウス・ウェールズ州立図書館前にあるフリンダース像の後ろには猫の足跡がついている。その先をたどると、クモの巣だらけのトリムの像が凛々しくご主人様を見上げていた。



過酷な生活との闘い

横断歩道を渡るとすぐに王立植物園への一つ目の入口があり、入ってすぐのところには、アーサー・フィリップ初代総督の彫像を中心にデザインされたネオ・クラシカル様式の大噴水がある。美しい入り江に面した一帯は、フィリップが植民地初の農場として開拓したことから、ファーム・コーヴと呼ばれている。

約780人の囚人のほか、役人や海兵隊、それに船員が乗り込んだ全11隻から成るファースト・フリートは、1787年5月に英国を立ち、8カ月後に入植予定地のボタニー湾に到着したが、湾内は水深が浅く、水源近くに安全に停泊することが難しい上、周辺に肥沃な土地も見つからなかった。開拓に適さないと判断したフィリップは、ポート・ジャクソンへ入植することを決断して船団を移動させ、当時の英国内務大臣シドニー卿にちなんで、「シドニー・コーヴ」と命名した上陸地を「世界一の天然の良港」と報告している。



上：シドニー病院は、ラム酒の独占輸入販売権と引き換えに建設費を調達して建てられたため、「ラム病院」の異名を持つ

右：30ヘクタールに及ぶ王室植物園の広大な敷地はオペラ・ハウスやミセス・マックオーリー岬につながっていて、緑溢れる都会のオアシスになっている



ニー最古の住宅、カドマンズ・コテージがあり、その隣の公園で行き交う船を眺めているのは、1806年に着任した第4代ウィリアム・ブライ総督の像だ。への字に締まった口元と、しっかりと胸元で組んだ腕に妥協を許さない性格が現われている。

前任のキング総督の2倍の給料という高待遇でブライが着任した頃には、植民地警備のために派遣されていたニュー・サウス・ウェールズ軍団の将校たちが、ラム酒貿易を独占して莫大な利益を得るようになっていた。約5年間に渡って植民地を統治したフィリップが病氣療養のため帰国の途についてから、次のハンター総督が到着するまでに生じた約3年間の空白期間に乗じて、実権を掌握することに成功した軍団の影響力を、ハンターやキングは阻止しきれなかったのだ。

腐敗ぶりを目の当たりにしたブライは、ラム酒取引を制限するなど、厳しい方針を打ち出した。不公正な状況が改善されたことに感謝した自由移民からは、支持を表明する800人以上の署名入りの声明を受け取っている。他方、軍団や特権階級は真つ向から対立し、将校たちは1年以上に渡ってブ

ライを軟禁したため、次のマックオーリーが着任するまでは、事実上の軍政となった。

この「ラム酒の反乱」と呼ばれるオーストラリア近代史上唯一の軍事クーデターが起こったのは、今からちょうど200年前の1808年、奇しくも最初の入植者のシドニー上陸から丸20年後の1月26日のことだ。入



■ウィリアム・ブライ

William Bligh (1754 ~ 1817)

第4代総督(1806 ~ 1808)。初めて艦長の役目に就いた33歳のときにも、部下の反乱に遭い、約7メートルの救命艇に18人の乗組員と共に乗せられ、約5800キロ離れたティモールまで6週間の大航海を経て生還を遂げたブライ。映画化されたときに、「冷酷で横暴な独裁家」として描かれたが、それほどひどい暴君ではなかったらしい。

植を記念した祝日「オーストラリア・デー」は、見方を変えれば侵略記念日であり、反乱記念日にもなりえる。日本語では、建国記念日と訳されることが多いけれど、オーストラリア連邦の誕生は、入植から一世紀以上後の1901年1月1日だ。

数万年前から人が住んでいたというのに、国としての正式なスタートはわずか三代目くらい前、つまりおじいさんのおじいさんあたりの時代だ。日本でいえば鎖国真っ最中の江戸時代に建てられた建造物がそのまま何気なく使われているシドニーの街角に立つて周りを見渡すと、目に映るあれもこれも、そして、今当たり前のよう存在しているあらゆる社会の制度が220年前には何一つなかったんだ、と何とも不思議な事実に感嘆してしまう。

不毛の土地と思われていた大陸は移民大国になり、資源ブームに沸いている。今から3世代先は、いったいどんな風になっているのだろうか？ 流刑地だった歴史的背景のせいか、反権威主義の色濃いこの街で、どんな功績のあった人物が新たに銅像になっているのか興味深い。